國學院大學学術情報リポジトリ

外国人が見た古事記：130年目の古事記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平藤, 喜久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001711

外国人が見た古事記

—130年目の古事記—

平　藤　喜久子

１．はじめに

1882年(明治15年)にイギリス人のバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain1850-1935)が古事記を英語に翻訳し、雑誌 "Transactions of the Asiatic Society of Japan" に発表してから130年経った。この翻訳は、翌1883年に単行本として刊行される。同年には、レオン・ド・ロニ(Leon Lucien Prunol de Rosny, 1837-1914)によって古事記の上巻のフランス語訳(部分訳)である *Koziki* も刊行された。古事記が世界に開かれてから130年が経ったことになる。本稿ではこの130年の間に外国人の研究者たちがどのように古事記に向き合ってきたのかを概観してみることにしたい。

２．19世紀ヨーロッパと古事記

18世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパではさまざまな学問分野で革新的な出来事があった。宗教に関わることでいえば、進化論で知られるダーウィンの『種の起源』は1859年の発行である。生物は、環境に適応して変化していく。人間も環境に適応してこのような姿になったとするこの考えは、神が自分の姿に似せ、この姿で人間をつくったとする聖書の記述が信じられていた社会にとっては、大きな衝撃だったろう。また、聖書には描かれていない古代の文明、文化の存在も次々と明らかとなり、人々の関心を大いにひきつけた。キッペンベルクはこうした「未知の文化の解読」の流れを次のよう

に述べている[1]。

瞬く間に教養人たちを惹きつけた古代文化の復興(die Renaissance der Antike)が、また西欧世界を超えた発見の知的かつ情念的土壌を準備したのである。いわば七つの封印にながらく閉ざされていた、異質な文化の残した文書遺産がヨーロッパ人によって解読され、その内容をさらしはじめたのである。衝撃に次ぐ衝撃、解読に次ぐ解読。

1771年には長く解読されていなかったゾロアスター教のアヴェスタが翻訳され、1822年にはシャンポリオンによってロゼッタストーンの解読が試みられ、古代エジプトのヒエログリフが解読された。1854年にはニネヴェ(現在のイラク北部のモスル)でアッシリアの王アッシュルバニパルの図書館とそこにある大量の粘土板が発見された。中には1872年に明らかとなる『ギルガメシュ叙事詩』の書板も含まれていた。

こうして明らかになっていく古代の神話や聖典について、それらをギリシャや聖書などと比較していく比較宗教学、神話学という学問も現れてくることになった。

この時期の代表的な宗教学者として、マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller, 1823-1900)とタイラー(Edward Burnett Tylor, 1832-1917)の名を挙げることができる。ミュラーは、比較言語学の強い影響下に、インド・ヨーロッパ神話の比較研究を行った。彼は神名の比較によって語源を探求するという方法を用い、神話について、そもそも日の出や日没といった太陽の動きを中心とする自然現象を表現していた言葉が、次第に本来の意味が忘れられ、誤解されたりする中で発生したものとした。いわゆる「言語の疾病」による神話の発生という過程を想定したのである。また、彼は1879年から『東方聖典集』を刊行し、仏教、道教、イスラーム、ジャイナ教などアジアの諸宗教の聖典の英訳を刊行し、まさに宗教学の基礎を築いた。他方、タイラーは、「未開」社会の研究を行い、神話や宗教は自然界のあらゆるものに霊魂が宿るという「アニミズム」が基礎になって発生したと考え、さまざまな文物を世界中から集め、そのコレクションはオックスフォード大学のピット・リ

ヴァース博物館に収められている。

そして彼らはいずれも開国したばかりの日本、古事記に関心を抱いていた。タイラーは1877年に、当時イギリスに留学していた馬場辰猪(1850-1888)に、古事記の前半部分を翻訳してもらい、その神話を他地域の神話と比較するという内容の講演をロンドン王立人類学会で行っている(2)。この論考が外国人による日本神話研究の嚆矢となった。

このように未知の文化への関心が高まっていたなかで、開国したばかりの日本の古事記も注目を集めていったといっていいだろう。

3．チェンバレンと古事記

チェンバレンが古事記の翻訳を行ったのは、こうした学問状況下であった。その翻訳の背景には、マックス・ミュラーの影響が少なからずあると考えられる。楠家重敏によれば、公刊はされていないが故吉阪俊蔵がチェンバレン関係の書簡を保管しており、そのなかにミュラーからの書簡が六通含まれているという(3)。またイギリスのNational Archivesが所蔵しているアーネスト・サトウがアストンに宛てた手紙によれば、目の病気のため1880年に海軍兵学校を休職して一時帰国していたチェンバレンは、オックスフォードでミュラーのところに滞在していた(4)。1881年1月のサトウの書簡には、その頃チェンバレンは古事記を翻訳中であったと記されていることから(5)、ミュラーのところに滞在していた時期と古事記が翻訳されていた時期は重なっていることがわかる。このことからもチェンバレンの翻訳へのミュラーの影響を推察することができるだろう。

チェンバレンの翻訳の特徴については、他所でも述べているので、ここでは簡単に紹介しておく(6)。文体は、Translator's Introductionでも述べられているとおり、素朴な直訳が心がけられている(7)。解釈や訓読にあたっては本居宣長を高く評価しており、「古事記伝」に習う形で翻訳が行われている(8)。

神名や地名については、原則として漢字の一字一字の意味を翻訳して表記

する。例えば天御中主神は、Deity Master-of-the-August-Centre-of-Heaven、天照大神は Heaven-Shining-Great-August-Deity、高天原は Plain of High Heaven と表記される。

チェンバレンは、Translator's Introduction で、その翻訳の目的について、古代日本の習慣や伝統、思考などを明らかにし、英訳することによってヨーロッパの研究者の研究に寄与することにあると述べている(9)。そのための素朴な文体による解釈をまじえない翻訳スタイルだといえよう。

イザナキとイザナミのおのころ島での結婚の場面を次に引用する(10)。

Having descended from Heaven onto this island, they saw to the erection of an heavenly august pillar, they saw to the erection of a hall of eight fathoms. Tunc quaesivit [Augustus Mas-Qui-Invitat] a minore sorore Augusta Femina-Qui-Invitat: "Tuum corpus quo in modo factum est?" Respondit dicens: "Meum corpus crescens crevit, sed est una pars quae non crevit continua." Tunc dixit Augustus Mas-Qui-Invitat: "Meum corpus crescens crevit, sed est una pars quae crevit superflua. Ergo an bonum erit ut hanc corporis mei partem quae crevit superflua in tui corporis partem quae non crevit continua inseram, et regiones procreem?" Augusta Femina-Quae-Invitat respondit dicens: "Bonum erit.".

下線を引いたところは、イザナキとイザナミが男女の体の違いを述べあい、性交をする場面である。チェンバレンにとって「猥褻」であるとされた部分は、英語ではなくラテン語によって翻訳されているのである。こうしたラテン語による翻訳には、19世紀ヴィクトリア調の道徳意識も読み取ることができる。

彼の翻訳は、西欧の神話研究だけではなくさまざまな方面に影響を与えた。ラフカディオ・ハーンは、1890年にチェンバレンの紹介もあって島根県尋常中学校、師範学校に英語教師として赴任する。彼の「英語教師の日記から」や「八重垣神社」といったエッセイには、ハーンがチェンバレンの *Kojiki* を携えていたことがうかがえる。日本にやってきたばかりのハーンにとって、

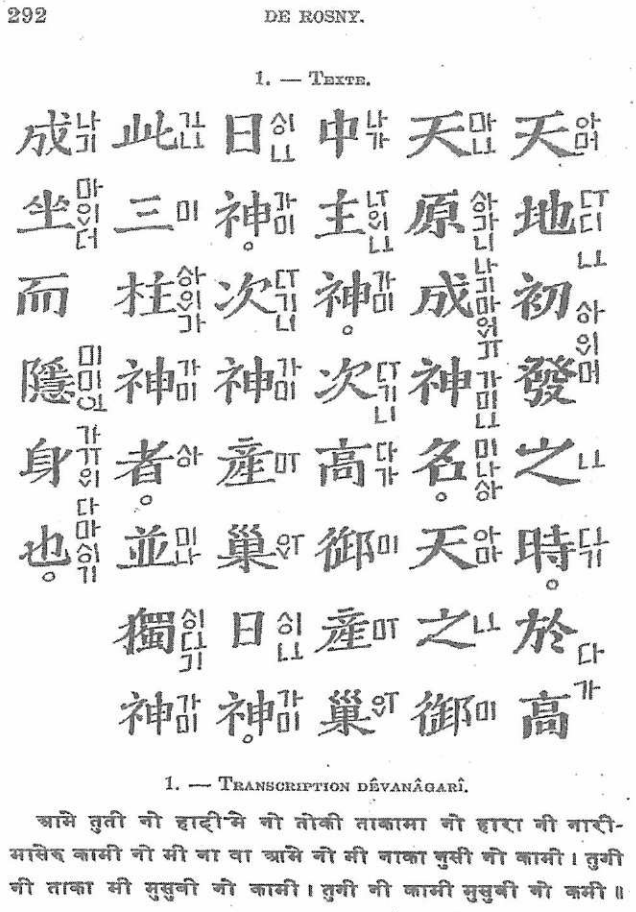
最初の赴任地である島根(出雲)と神話の世界をつないだのはチェンバレンの *Kojiki* であったに違いない。

日本でも、古事記の最初の英訳は、国学者たちを刺激した。飯田永夫らは1888年にチェンバレンの *Kojiki* の Translator's Introduction を部分的に訳し、そこに注釈や批判などを加える形で『日本上古史評論』を刊行している。

チェンバレンの *Kojiki* は2004年からペーパーバックでも刊行され、また著作権が切れたことからインターネット上でも広く公開されている。一部ラテン語があるとはいえ、現在でも英語で手軽に読めるものとして活用されているといえるだろう。

4．レオン・ド・ロニと古事記

チェンバレンの *Kojiki* とほぼ同時期に刊行されながら、まったく違った特徴をもつのがレオン・ド・ロニの *Koziki: Memorial de l'antiquité Japonaise: Fragments relatifs a la théogénie du Nippon*[11]である。ロニは、もともと中国語を学んでいたが、その後独学で日本語を習得し、1862年に文久遣欧使節団が来仏すると、通訳としてその一行を案内し、福沢諭吉らと親交を深めた[12]。1868年に東洋語学帝国学校の日本語講座が正式に開講されると、ロニは初代の教授に就任した。そして1871年には古代からの日本


292　DE ROSNY.

1. — Texte.

成 此 日 中 天 天
坐 三 神 主 原 地
而 柱 次 神 成 初
隱 神 神 次 神 發
身 者 產 高 名 之
也 並 巢 御 天 時
獨 日 產 之 於
神 神 巢 御 高

1. — Transcription dêvanâgarî.

आमे तुती नो हादी-मे नो तोकी ताकामा नो हारा नो नारी-
मासेच कामी नो मी ना वा आमे नो मी नाका नुसी नो कामी। तुगी
नो ताका मी मुसुबी नो कामी। तुगी नो कामी मुसुबी नो कमी॥

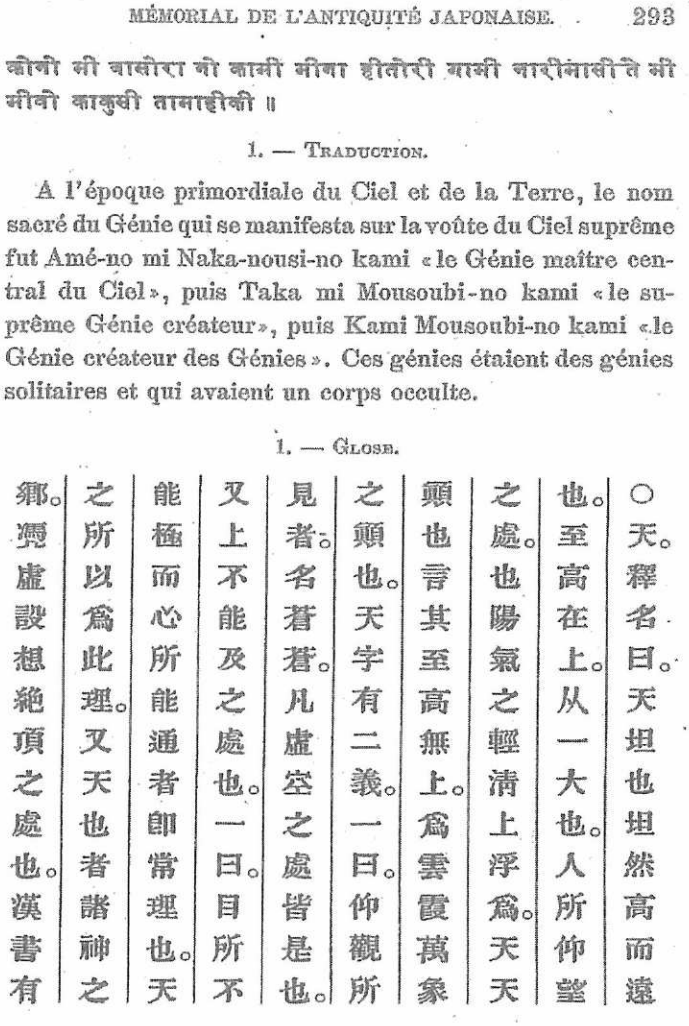
［資料１］ロニ *Koziki*

の歌をフランス語に訳した *Anthologie japonaise: poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon* も刊行している。

知日派のフランス人として活躍していたロニの *Koziki* についてみてみたい。

彼が *Koziki* で翻訳したのは、古事記上巻の冒頭からイザナキ、イザナミの誕生までである。そこまでに訓読と訳、注を記している。

一見するとわかるように、ただ古事記をフランス語に翻訳したものではない。［資料1］では、まず古事記の本文があり、そのわきに読みが振られている。これはハングルとして読めるが、いわゆる神代文字（神字）の一種である。ロニは平田篤胤の『神字日文伝』を入手しており、その影響を受け、神代文字を記したと考えられる。ただし、篤胤は、神字が朝鮮の文字とほぼ同じであることを認めた上で、それが日本から朝鮮に伝わったものであるとしているが[13]、ロニは、朝鮮の古代からの文字が日本にもたらされ、神字になったと考えている。さらに *Koziki* の前書きなどで、神字のもともとの起源はインドにあったのではないかという可能性を唱えた。そのことと関連するのが、［資料1］から［資料2］にみられる古事記本文のデーヴァナーガリー文字への転写である。ロニによれば神字の起源はインドにあるので、神字をデーヴァナーガリー文字へ転写することも容易だという[14]。デーヴァ



MÉMORIAL DE L'ANTIQUITÉ JAPONAISE. 293

कोनी नी वासोरा नो कामी मीना हीतोरी माभी नारीमासीते भी मीनो काकुसी तामाहीकी ॥

1. — Traduction.

A l'époque primordiale du Ciel et de la Terre, le nom sacré du Génie qui se manifesta sur la voûte du Ciel suprême fut Amé-no mi Naka-nousi-no kami «le Génie maître central du Ciel», puis Taka mi Mousoubi-no kami «le suprême Génie créateur», puis Kami Mousoubi-no kami «le Génie créateur des Génies». Ces génies étaient des génies solitaires et qui avaient un corps occulte.

1. — Glose.

○天。釋名曰。天坦也坦然高而遠也。至高在上。从一大也。人所仰望之處也。也陽氣之輕清上浮爲。天天顛也言其至高無上。爲雲霞萬象之顛也。天字有二義。一曰。仰觀所見者。名蒼蒼。凡虛空之處皆是也。又上不能及之處也。一曰。目所不能極而心所能通者卽常理也。天之所以爲此理。又天也者諸神之鄉。覺虛設想絶頂之處也。漢書有

［資料2］ロニ *Koziki*

ナーガリー文字と神字(ハングル)は、いずれも子音字＋母音字の組み合わせによって一つの文字が成り立っているため、文字の仕組みに共通性があるということである。

フランス語による翻訳は［資料２］の中央部にあるTRADUCTIONとある部分である。そしてその下には漢文による注釈が加えられている。ロニによる翻訳や神字による訓、および注釈の加え方は、ほぼ古事記伝を踏襲したものである。注釈部は、古事記伝とほぼ同じ内容となっており、古事記伝をそのまま翻訳し、掲載していると推測される箇所も散見される。

ロニは1914年に亡くなる。日本への訪問を望みつつも一度もその願いは叶うことがなかった。しかし日本に関する多くの著作や翻訳本を送り出し、また来仏した日本人たちへの情報提供者ともなった。その翻訳は、現在も活用されているチェンバレンのものと比べると、ずいぶん風変わりで、学術的な価値も低いようにみえるが、未知の文化であった日本の神話に魅せられ、生み出した「想像された」古事記という点で興味深い(15)。

５．古事記翻訳の現状と課題

チェンバレン、ロニによる古事記の翻訳から130年が経った。その間に古事記は英語、フランス語で再び翻訳されたほか、ドイツ語、イタリア語、ポーランド語、ロシア語、中国語、韓国語、シンハリ語などさまざまな言語に翻訳されている。

2000年代後半からは、次のようにヨーロッパでの翻訳の出版が相次いでいる。

・イタリア語

Paolo Villani, *Kojiki. Un racconto di antichi eventi, Marsilio*, 2006.

・スペイン語

Carlos Rubio, Rumi Tani Moratalla, *Kojiki : Crónicas de antiguos hechos de Japón*, Editorial Trotta, S.A., 2008.

・ドイツ語

Klaus Antoni, *Kojiki -Aufzeichnung alter Begebenheiten,* Verlag Der Weltreligionen, 2012.

ヴィラーニは、日本の大学で古典文学を学んだ日本学者で、今回刊行された翻訳は、イタリアでは1938年のMario Maregaによる翻訳以来の出版である[16]。わかりやすい文体で、読みやすく、日本の新書版とほぼ同じサイズの手に取りやすいものとなっている。

ルビオは、言語学を専門としており、マドリード大学で日本語、日本文学を教えている。三島由紀夫の『仮面の告白 *Confesiones de una mascara*』や『青の時代 *Los años verdes*』のスペイン語訳も出版している。古事記のスペイン語への翻訳は、今回のルビオによるものがはじめての試みである。

アントーニはテュービンゲン大学で日本神話、近世、近代の日本思想を研究している。古事記のドイツ語訳は、1901年刊行のKarl Florenzによる部分訳[17]、1940年の木下祝夫による翻訳に次ぐ訳である[18]。全825頁だが、翻訳は9頁から270頁。約３分の２程度は詳細な注釈、解説になっている。古事記の研究史についても詳しく論じられており、語注は、チェンバレン、フィリッパイ、フローレンツ、ネリー・ナウマン、大林太良ら先学たちの成果を盛り込んだ充実した内容となっている。翻訳にとどまらない、アントーニの古事記研究の集大成ともいえる著書である。

また現在もフランスではフランソワ・マセ(国立東洋言語文化大学教授)、アラン・ロシェ(フランス国立高等研究院教授)による翻訳が進められている。

さて、このように多くの言語に翻訳されている古事記であるが、違う言語に訳すということには、当然さまざまな問題がある。ここではとくに西欧言語に訳したときの困難さについて、ローマ字化と敬語を例として取り上げてみたい。

①ローマ字化

古事記はすべて漢字で記されている。そのなかの神名や地名といった固有名詞について、漢字の意味を訳するか、あるいはその読み(音)をローマ字化するか、また上代の音に近づけてローマ字化するかが問題となる。さらにはヘボン式か訓令式かという違いもある。たとえばヘボン式では、「し」は「shi」だが、訓令式では「si」となる。「ち」はヘボン式では「chi」、訓令式では「ti」である。ヘボン式の方がより実際の発音に近い音となる。

「高天原」、「天照大神」、「大国主神」について、チェンバレン、1968年に英訳したフィリッパイ[19]、イタリア語(ヴィラーニ)、スペイン語(ルビオ)、ドイツ語(アントーニ)のものを次に挙げる。

「高天原」

英語・チェンバレン：Plain of High Heaven

英語・フィリッパイ：TAKAMA-NÖ-PARA

イタリア語・ヴィラーニ：pianure del sommo cielo

スペイン語・ルビオ：Altiplano del Cielo

ドイツ語・アントーニ：Takama- nó- hara, Hohe Himmelsgefilde

「天照大神」

英語・チェンバレン：Heaven-Shining-Great-August-Deity

英語・フィリッパイ：AMA-TERASU-OPO-MI-KAMÏ

イタリア語・ヴィラーニ：Amaterasu

スペイン語・ルビオ：Amaterasu

アントーニ：Ama-terasu-oho-mi-kamí

「大国主神」

英語・チェンバレン：The Deity-Master- of-The-Great Land

英語・フィリッパイ：OPO-KUNI-NUSI

イタリア語・ヴィラーニ：Ohokuninushi
スペイン語・ルビオ：Oo-kuni-nushi
ドイツ語・アントーニ：Oho-kuni-nushi-nó- kamí

前述のとおり、チェンバレンは漢字を翻訳して表記する。高天原については、イタリア語のヴィラーニ、スペイン語のルビオも同様で、アントーニは、読みのローマ字化したものと漢字の意味を訳したものを併記している。神名についてはヴィラーニ、ルビオが神、命を省き、読みをローマ字化する。アントーニは、漢字ごとにハイフンをいれつつ、読みをローマ字化し、さらにドイツ語の発音の便を考え、アキュート・アクセントを使用している。ルビオは、天照大神にはハイフンを入れないが、大国主神には入れている。全体をみてみると基本的には漢字ごとにハイフンをいれており、天照大神(Amaterasu)や伊耶那岐神、伊耶那美神(Izanagi, Izanami)などの場合が例外的にハイフンを入れない形となっているようだ。フィリッパイは、漢字ごとにハイフンを入れるが、さらに彼の場合、訓令式を用いてローマ字化している。

注目されるのが、彼が上代の発音を再現しようと試みている点である。フィリッパイは、橋本進吉や大野晋の上代特殊仮名遣いの研究を参照し、八母音説に従った[20]。この説では「キ」「ヒ」「ミ」「ケ」「へ」「メ」「コ」「ソ」「ト」「ノ」「モ」「ヨ」「ロ」に漢字の書き分けが見られ、それは発音の違いであるとされた。その書き分けは二種類であり、便宜的に甲類、乙類とされる。大野晋はその母音について甲類を i, e, o 、乙類を ï, ë, ö と表記した。フィリッパイはこの説に従って、ローマ字化した。またハ行はかつてパ行であったことも考慮し、再現している。現代日本語からみると、違和感があるかもしれないが、当時の日本語学の研究状況を反映した翻訳であるといえよう。なお、日本書紀の英訳を行った言語学者のベンテリー(John R Bentley)は、言語学の研究成果を翻訳に行かすべきであるという立場に立ち、上代語の発音を再構築し、翻訳、ローマ字化を行っている[21]。

②敬語

古事記の序は、「臣安万侶言」とはじまる。臣下が天皇に対して述べる「上表文」の形式であり、姓は述べずに「安万侶」と名前だけを述べ、へりくだりをあらわす。この表現に対する対応も訳者によって様々である。チェンバレン、フィリッパイ、ヴィラーニ、アントーニの訳を下に挙げる。

「臣安万侶言」

英語・チェンバレン：I Yasumaro say

英語・フィリッパイ：I Yasumarö do say

イタリア語・ヴィラーニ：Parole di Yasumaro, servitore di sua altezza, aggiunte come memoriale

スペイン語・ルビオ：Yo, el súbdito Yasumaro, os informo

ドイツ語・アントーニ：Als Diener spreche ich, Yasumaro

チェンバレンとフィリッパイは、そのままの直訳であるが、「臣」を訳さず、「言」を「say」としているため、天皇に対してへりくだっている文章であることは伝わらないようになっている。また姓がなく名だけであることも、さらに伝わりにくくしており、逆に意に反して天皇との親しささえ浮かび上がってしまうことになるといってもよい。それに対しヴィラーニは、"servitore di sua altezza"（陛下のしもべ）と付け加えることにより、その文意を伝えようとしている。ルビオは"el súbdito"（臣民、臣下）を加えており、アントーニも" Als Diener "（しもべとして）と加える工夫をしている。冒頭部分の短い比較ではあるが、「臣～言」の部分だけでも変化が見られる。

2009年1月に筆者は古事記の翻訳に取り組んでいるアントーニのもとを訪れ、翻訳の過程について説明を受けた。アントーニによると、2006年にThe Tuebingen University *Kojiki* projectを立ち上げ、序文を一文一文に分け、チェンバレン、フローレンツ、フィリッパイ、木下の翻訳をそれに対応させ、検討を加えるという作業を行ってきたという。先行翻訳の研究も新

しい翻訳には反映されている。

ヨーロッパの言語に限らず、異なった文化の言語への翻訳はさまざまな困難さがともなう。千木や鰹木、榊といった、日本にしかない神道の用語のほか、服装や髪型などは現代日本語にしても理解するのは難しい。そうした難しさについて、韓国語への翻訳を行った魯成煥は、イザナキの黄泉の国訪問の場面で、イザナミの髪型「みずら」と表現されている部分について、注に［図１］の絵を掲載し、読者の理解を助ける工夫をしている[22]。

［図１］

こうした工夫はもちろん日本語の本でもなされているが、翻訳の場合、とくにこうした絵や図を効果的に使用することがより速やかな理解を可能にする。

６．おわりに

チェンバレンによる古事記の翻訳から130年。さまざまな言語への翻訳がなされてきた。古代日本語の発音、敬語を中心に取り上げたが、このわずかな例からもわかるように古事記の翻訳とは、古代日本の文化を他の文化へと翻訳することである。その蓄積を振り返ることは、あらためて古事記についてだけではなく言語を含めた広い意味での日本文化について考えることになる。この点でもこうした海外での古事記研究の状況は把握していく必要があるだろう。また、異文化へ古事記を伝える試みは、現代日本で古事記を伝える際にも参考になるだろう。それは外国人と古事記に距離があるように、現代日本人と古事記の間にも相当の距離があるからである。異文化といっても過言ではないだろう。このことは神話の授業を担当していても強く実感される。

古事記を外国に伝えるためのさまざまな工夫が日本での古事記の学びにとっても有効であるならば、日本において各国語の翻訳の状況をデータベー

ス化し、翻訳者同士のネットワーク形成を行い、国内外の研究者に翻訳や教育のための発信を行っていくことも意義のあることだろう[23]。

最後に現在の神話学との関わりについて触れておきたい。近年遺伝子工学の発展などにより人類史の再建を試みる研究が盛んになっている。人類の起源の地、アフリカから人々がどのように移動し、現在のような地理的な分布と文化の違いが生まれてきたのか。この問題について遺伝学や気象学、考古学などとともに、神話の比較からもアプローチしていこうとする研究も生まれてきている。古事記は、日本の神話であるとともに人類の文化遺産として人類史を再構築する手がかりの一つになっているといってもいい。こうした研究の展開にとっても、翻訳された古事記の果たす役割は大きくなっていくだろう。

註

（1）ハンス・G・キッペンベルク『宗教史の発見』岩波書店、2005年、p.38

（2）Edward B. Tylor, "Remarks on Japanese Mythology", in *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, Vol. 6(1877), pp. 55-60.

（3）楠家重敏「チェンバレン書簡の研究（1）」『武蔵野英米文学』VOL.21、1989年、15-28頁。

（4）National Archives 蔵、所蔵番号 PRO30/33, p.132.

（5）前掲資料 , p.129.

（6）千々和到、平藤喜久子、福島直之、石井敦、星野靖二「新出のB・Hチェンバレン、E・B・タイラー宛書状の紹介と検討」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第3号、2011年3月、166(45)-133(78)頁。

（7）B.H. Chamberlain, *Kojiki, or 'Records of Ancient Matters'*, Lane Crawford, 1883, p. iii .

（8）青木周平「明治期の『古事記』研究―明治十五年と明治三十二年を軸として―」『古事記の研究史』古事記研究大系２、高科書店、1999年、

217-241頁。

(9) Chamberlain, ibid, pp. ii - iii .

(10) Chamberlain, ibid, pp.22-23.

(11) Léon de Rosny, *Ko zi-ki. Mémorial de l'antiquité japonaise, fragments relatifs à la théogénie du Nippon*,1883.(出版社不明)

(12) 司馬遼太郎の小説『翔ぶが如く』(文藝春秋、1975年)第1巻の冒頭には、薩摩出身の警察官僚川路利良(1834-1879)が警察機構の視察にフランスに赴いたときのエピソードとして、日本びいきのロニが川路ら一行のもとを訪れ、日本についてあれこれと質問をする話が描かれている。

(13) 平田篤胤『神字日文伝』上巻(『新修平田篤胤全集』第一五巻、183頁)。

(14) Rosny, ibid, p.286.

(15) ロニの日本神話論については、次の拙論で詳しく取り上げた。平藤喜久子「レオン・ド・ロニと日本神話」『学習院大学國語國文学会誌』第49号、2006年3月、34～46頁。

(16) Mario Marega, *Ko-gi-ki : Vecchie-cose-scritte : libro base dello shintoismo giapponese*, Bari, 1938.

(17) Karl Florenz, *Japanische Mythologie. Nihongi. „Zeitalter der Götter", nebst Ergänzungen aus anderen alten Quellenwerken*, Hobunsha, Tokyo 1901(ただし古事記は255頁から275頁までで、部分訳)

(18) Iwao Kinoshita(木下祝夫), *Aelteste japanische Reichsgeschichte*" (*Kojiki*), Herausgegeben vom Japanisch-Deutschen Kulturinstitut zu Tôkyô und Japaninstitut zu Berlin, 1940.

(19) Donald L. Philippi, *Kojiki,* University of Tokyo press, 1968.

(20) Philippi, ibid, pp20-25.

(21) ジョン・R・ベンテリー「日本書紀の英訳について」『神道・日本文化研究国際シンポジウム(第2回)〈神道〉はどう翻訳されているか』國學院大學21世紀ＣＯＥプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」、2004年、48-66頁

(22) 魯成煥譯註『古事記』上、禮典社、1987年、61頁。

(23) 國學院大學では、2003年9月に下記の国際シンポジウムを行い、古事記、日本書紀の翻訳者たちを招いて議論を行ったことがある。

第２回神道・日本文化研究国際シンポジウム「＜神道＞はどう翻訳されているか」

日時　2003年9月20日14：00～18：00、9月21日10：30～17：30

場所　國學院大學百周年記念館視聴覚教室

発題者及びテーマ

Ann Wehmeyer(アン・ウェイマイヤー、アメリカ、フロリダ大学準教授)

「翻訳で失われて残念だと思った本居宣長の『古事記伝一の巻』」

Mark McNally(マーク・マクナリー、アメリカ、ハワイ大学助教授)

「解釈学的な算術としての国学の翻訳」

John R. Bentley(ジョン・ベンテリー、アメリカ、北イリノイ大学助教授)

「日本書紀の英訳について」

François Macé(フランス、国立東洋言語文化研究所教授)

「古事記翻訳の試み」

魯成煥(韓国、蔚山大学教授)

「古事記　翻訳に関する回顧」

コメンテータ

Helen Hardacre(アメリカ、ハーバード大学教授)